

まち探訪

「農業未来都市」「合宿の聖地」の創造をめざして 士別市



士別市基礎データ

○総人口（住民基本台帳）	19,460人 (平成29年7月末現在)	○農業産出額	12,660百万円 (平成27年市町村別農業産出額（推計）)
○世帯数	9,502世帯 (平成29年7月末現在)	○製造品出荷額等（総額）	11,165百万円 (平成26年工業統計調査)
○高齢人口（高齢化率）	7,450人 (38.3%)	○卸・小売年間販売額	31,082百万円 (平成26年商業統計調査)
○面積	1,119.22平方キロメートル	○市の花	エゾノリュウキンカ・コスモス・ エゾムラサキツツジ
○人口密度	17.39人	○市の木	ナナカマド・アカエゾマツ
○一般会計規模（歳出予算ベース）	17,511百万円 (平成29年度補正後)		

問合せ 総務部総合企画室秘書広報課 0165-23-3121

士別市の紹介

地方分権の進展や日常生活圏の拡大、少子高齢社会への対応など、さまざまな社会的課題に対応するため、平成17年9月1日に旧士別市と旧朝日町が合併して誕生した市です。

北海道北部の拠点都市である旭川市から車で約1時間北上した、日本海沿岸とオホーツク海沿岸を結ぶ中間点に位置する田園都市で、その市域は、東西に約58km、南北に約42kmの広がりを持ち、1,119.22km²の行政面積を有しています。行政面積の約75%が山林であり、道立自然公園に指定されている標高1,557.6mの「天塩岳」や北海道第2の大河「天塩川」の源のまちともなっており、そのほかにも多彩で美しい風景が点在するなど、自然環境豊かなまちです。

両市町は、それまでの行政運営や通学、商工業などにおいて強い結びつきがあったこともあり、新たなまちづくりは、住民相互の融和と一体感の醸成のもと、互いのまちが有する魅力や資源を存分にいかしつつ、健全で効率的な財政運営により、市民をはじめ、本市を訪れる方にも豊かさが感じられるまちをめ

ざしてきました。



道立自然公園に指定されている天塩岳

特徴的なまちづくり

自然環境豊かな地域特性を生かし、農業を中心に特徴的なまちづくりを進めています。特に、その一つである「羊（サフォーク種）」を顔としたまちづくり運動は、市民と行政の連携によって長年にわたって進められてきた取り組みです。

士別市とサフォークの出会いは、昭和42年に農家の複合経営を支援するため、オーストラリアから食肉用として100頭のサフォークを導入したのがはじまりです。採算のとれる

家畜としては評価が低かったものの、肉や毛の活用など、ほかの地域では取り組んでいない「まちの顔」をつくろうと、昭和54年の開基80周年を契機に、北海道で初めて「サフォークによるまちづくり」に行政・商業・工業・農業などが一体となり取り組むことになりました。



顔が黒いのが特徴のサフォーク

特に、市民活動団体としての「サフォーク研究会」が昭和57年に組織されたのをはじめ、手づくりの羊毛製品を製造販売する市民会社の設立や世界の羊30種類を集めた「世界のめん羊館」などの観光施設の整備、食材としての士別産サフォーク羊肉の魅力を広める取り組みなど、市民と行政の連携のもとにサフォーク羊を活用した地域の活性化が進められ、現在も継続的に取り組まれています。



多種多様な羊毛製品を製造・販売

効率かつ安定的な農業をめざして

士別市は「うるち米」の最北端の生産地域とされています。一帯は盆地で、夏季における昼夜の寒暖差が大きく、美味しいお米が収

穫できるため、北海道を代表する良質米産地と自負しています。しかしながら、農業者の高齢化や後継者不在の課題もあり、農家数が年々減少しています。離農跡地を個人経営で受けていくにも限界となっており、思い切った経営の再編や転換が必要となっていました。

こうしたことから、お米の生産基盤と農村集落機能（地域コミュニティ）を次代に維持継承していくことを目的に、水稻の作付け割合が60%を超える上士別地区において、受益農家や関係機関が一体となって、平成21年から「上士別地区国営農地再編整備事業」を実施しています。

この事業により、①効率的な大区画圃場（標準区画3.4ヘクタール）に整備、②地区内に4つの集落経営体を組織し、離農跡地を集積、③米のブランド化や6次産業化を図るため、その4つの経営体が目的に応じ連携し、新規就農希望者や離農農家にも新たな役割を担って地域に定住することができる体制の構築など、新たな本市農業農村のモデル地区として位置付けています。

【再編内容】

- ・受益区域約2,300枚の圃場を、およそ300枚にするため、1ブロック（号線間）にある50～70枚の圃場を8枚に集約（標準区画3.4ヘクタール）
※最大6.8ヘクタール（520メートル×130メートル）の水田圃場は、北海道一の広さを誇る。



北海道最大を誇る6.8ヘクタールの水田圃場

低コスト農業の実現に向けてICT技術の導入

水田圃場の大型化が進む中、スケールメリットを生かした低コスト農業を実現するため、上士別地区の農家や後継者が集い「上士別IT農業研究会」が設立されました。生産過程のICT化をめざし、衛星利用測位システムを活用した農業機械の自動操舵による農作業のロボット化を主な活動内容としています。今後、ロボット化の実現により、別の場所でモニタを見ながらの夜間作業が可能となったり、無人トラクターが耕運している間に別の作業が行えたり、また、これまでの長時間乗車による身体的疲労が軽減されたりするなど、労力節減や作業時間拡大の効果が期待されています。



衛星利用測位システムを活用した農業機械の無人化をめざす

2020東京オリ・パラに向けて

士別市は合宿誘致に力を入れており、夏は陸上競技、冬はスキージャンプの選手を中心に、あわせて約2万人のアスリートが合宿に訪れています。

そのような中、2020年東京オリンピック・パラリンピックにおける事前合宿の誘致や参加国・地域との交流事業などを行うため、国が進める「ホストタウン構想」第一次登録を27年12月に申請し、翌年1月に登録されました。これまでの事前合宿受入や本市出身オリ

ンピアンが存在など、歴史と実績があるウエイトリフティング競技での交流を目的として、相手国・地域を、同競技の強豪国の一つである「台湾」としました。

また、広域での交流を促進するために、近隣3町（和寒町・剣淵町・幌加内町）の関係団体とともに「士別地域日台親善協会」を昨年9月に設立しました。本年5月には、「日台親善協会」設立後初の台湾への公式訪問を行い、広域連携による「着地型観光」の推進のため、首長によるトップセールスを実施しました。本市においては、台湾との交流促進による地域振興及びホストタウンの取り組みとして、台湾からのウエイトリフティング競技直前合宿受入に向けた包括的交流協定を、中華民国拳重協会（台湾ウエイトリフティング協会）と締結しました。

その協定に基づき、7月29日から8月5日までの8日間、台湾国内において学生チャンピオンを多数輩出している、「国立台湾師範大学」のウエイトリフティング部が合宿に訪れ、市内ウエイトリフティング協会の選手との合同練習や、士別市をはじめ、近隣3町でそば打ちやお茶、弓道などの日本文化を体験しました。



ホストタウン構想により、ウエイトリフティング競技で台湾との交流を推進

こうして、この合宿の受け入れにより、ホストタウンとしての取り組みが一步前進したところであり、今後も「士別地域日台親善協会」を中心としたホストタウンの着実な推進を図っていきます。